

令和5年度 研究報告書

地域文化にふれる幼児教育



目次

はじめに 宮城利佳子	1
1. 「南城市大好き！」な子どもたちを育てることを目指して	
(1) 地域文化にふれる幼児教育 幼児教育センター長 與儀 毅	3
(2) 南城市地域文化研究会～わくわく会～幼児教育チーム	4
2. 研究チームの実践	
(1) 公私連携幼保連携型認定こども園 玉城こども園	
実践事例1 色水遊び 色が出るのが不思議だね	5～9
実践事例2 ハーリーってかっこいい	10～14
(2) 公私連携幼保連携型認定こども園 知念こども園	
実践事例 ちょうちょになって	15～26
(3) 南城市立久高幼稚園	
実践事例1 おいこみりょうってなに？	27～30
実践事例2 めぎセイラブーはかせ	31～35
(4) 公私連携幼保連携型認定こども園 佐敷こども園	
実践事例1 しまくとうばって面白い！！	36～39
実践事例2 トントンミーは恥ずかしがり屋さん	39～41
(5) 南城市立幼保連携型認定こども園 大里こども園	
実践事例 地域の伝統文化に興味を持つ	42～49
編集後記	50
おわりに 幼児教育センター長 與儀 毅	51

地域文化にふれる幼児教育

南城市幼児教育センター長 與儀 毅

私たちの市、南城市は豊かな自然環境があります。沖縄県では少なくなっている干潟、佐敷干潟がありミナミトビハゼ（トントンミー）の生息地で、奥武島から久高島にかけて広がるイノー（サンゴ礁に囲まれた浅い海）は波が静かで美しい景観を作り出しています。また、陸地では比較的平坦である沖縄本島南部に属しながらも、琉球石灰岩の地層特徴が強く現れ、高低差が大きく湧き水が豊富で、草花や野鳥、虫など特徴的な生態系があります。

歴史・文化についても、アマミキヨが国をひらいた神話や穀物が伝えられた神話の舞台で、市内には数々のグスクが存在し、琉球王国の初代国王である尚巴志の誕生の地でもあります。

このような自然環境や歴史・文化に恵まれた南城市の幼児教育施設では、地域の素材を遊びの中に取り入れ、保育実践が積み重ねてきています。しかしながら、保育者自身の生活拠点や出身地が他市町村であることや、本市の出身者であっても、地域の良さに詳しいとは限らない状況もあります。併せて、子どもたちも地域の行事や自然に触れる経験も多い状況にはありません。

自然環境や歴史・文化に恵まれた本市においても全国の状況と同様に、子どもの育ちをめぐる環境の変化は否めません。地域における地縁的なつながりの希薄化などにより教育育力の低下が懸念される状況にあると思います。

そのような中、南城市地域文化研究会～わくわく会～が設置され、保育者自身も地域のことを子どもと一緒に学ぶことを始めています。その取組みの中で実践した事例を令和4年度より報告書としてまとめており、今年度も引き続き取組み、実践を重ねています。

各園での地域文化を活かした実践が、保育者、子ども、そして保護者や地域の方々が地域の良さを再認識することとなっています。これからも実践を積み重ね、各園の取組みの共有化を図り、市全域で、地域のことが大好きで、地域を大切に育てる子どもを育てていきたいと思っています。

令和5年度 南城市地域文化研究会 ～わくわく会～ 幼児教育チーム
 =「南城市大好き！」な子どもたちを育てることを目指して=

1 実践事項

「地域文化にふれる幼児教育」

2 目的

地域とつながる子どもを目指して、保育者自身も地域のことを一緒に学ぶことで地域の良さを活かし、保育の質を高めていくことを目的とする。

3 実践内容

(1) 研究のいきさつ

- 令和4年度の取組で、子ども達が南城市の自然や文化を知る機会となった。しかし、保育者が南城市の自然や文化に対する知識が充分ではないと感じた。保育者自身が地域の自然や文化、わらべ歌等を知ることが大切である。
- 子ども達が日常の中で地域のことや社会のこと、伝統文化などを伝えられるようにしていきたい。
- 自然物を使って遊んだり、うちなあぐちの手遊び、わらべ歌を保育に取り入れていきたい。
- 昨年度に引き続き「南城市地域文化研究会～わくわく会～」を継続し、研究と実践を行っていくこととする。

(2) わくわく会メンバー

	氏名	役職
1	宮城 利佳子	琉球大学教育学部 講師
2	知念 麻末子	久高幼稚園教諭
3	高良 千尋	大里こども研究主任
4	大城 早苗	玉城こども園保育教諭
5	島袋 七海	〃
6	糸数 和香代	佐敷こども園主幹教諭
7	渡口 亜紀	〃
8	熊田 紫香	知念こども園園長
9	與儀 毅	教育委員会参事
10	仲本 留美子	幼児教育係長
11	伊集 恒子	幼児教育推進コーディネーター
12	大城 美恵子	幼児教育アドバイザー
13	大城 奈々子	こども保育課係長
14	親川 裕子	こども相談課保育支援員

(3) 年間計画 (研究会実施日)

第1回	6月 8日 (木)	発足と研究方針について
第2回	8月 31日 (木)	第1回実践事例検討会
第3回	11月 1日 (水)	第2回実践事例検討会
まとめ	12月 15日 (金)	実践事例提出

2 研究チームの実践

(1) 玉城こども園 実践者 4歳児担任：島袋七海 5歳児担任：大城早苗

玉城こども園は3歳児1クラス、4歳児2クラス、5歳児4クラスあり、園児数は160名である。

保育園、幼稚園こども園等では、これまでも伝統文化を経験することを大切に考え、保育に取り入れてきた。これまでは「伝統行事」が活動の中心であった。伝統行事の中には、時間が決まっているものが多く、毎年同じ時期に同じ活動を行うことになり、伝統行事を保育のなかで扱う目的や有義について十分に検討されていないことが多かった。また、これらの伝統文化の継承については、実生活のなかでほとんどの家庭で行われることがないのが現状である。

そこで、本園では、伝統行事を含めた単に伝統文化を経験するだけでなく、それが遊びの発展につながるように、また今度、子どもたちが継承の担い手の一助になるように、保育の中で取り入れる有義・目的を検討し、手立て(環境構成、保育者の援助)について、しっかり検証していきたい。



幼児の実態 ・草花に興味を持つ園児が少ない。
 ・色水遊びを楽しんでいる年長さんを真似て、ビニール袋に植物・水を入れてみる園児がいる。
 保育者の願い ・草木に触れ、遊びに取り入れることで、たくさんの発見や驚きを経験してほしい。

幼児の姿

年少からの進級児や年長さんがビニール袋に花を入れて色水遊びをしている姿を見て、「やってみたい」と真似をする園児が出てきた。摘んだ草花を袋に入れて水を入れることを楽しみ、色が出なくても満足している様子だった。草花をレンガや石で潰してみたり、バケツの中で混ぜてみたりと思いつきに遊ぶ姿から、色水コーナーの環境を整えていくことにした。

(1)4月中旬

進級児や年長児が袋で色水を作って遊んでいる姿を見て、「やってみたい」「先生ビニール袋ちょうだい」と真似て遊ぶ園児が増えてきた。園庭で目についたのかシロツメクサや芝生をちぎって入れる園児もいた。(思考力の芽生え・自然との関わり)

シロツメクサ入れてみたけど、あんまり色が出ないな。白色になると思った。



つめたくて気持ちいい～
全部青色に見える！すごい！



お姉ちゃんにやりかた教えてもらった！

もみもみしたり、しゃかしゃかしたら色が出たよ！

年長児がきれいな色水を作っているのを見て、挑戦する園児が増えてきた。始めはやり方が分からず、袋に水と草花を入れるだけで終わってしまい、遊びが広がらないためやる園児も減ってしまった。繰り返し遊んでいるうちに揉みこんだり振っていると色が出てくることを発見した園児がいたり、年長児に「花をつぶしたら色出てくるよ」と教えてもらって、色を出す方法に気づいてからは遊びの輪が広がっていった。

「なんで年長さんの色水は色が出るのかな？」と問いかけると「じゃあ、聞いてみよう！」と言って方法を聞きに行くことが出来た。また、やり方を友達や年少児に教えてあげる姿が見られた。出来たことや自分で発見したことを他児とたくさん共有してほしいな。

(2)4月下旬

袋での色水遊びから遊びが変わり、砂場用の道具やレンガや石を使って草木をつぶして遊ぶことが増えていった。園庭に生えている草木だけでなく、落ち葉や水草、土を水と混ぜて様々な料理に見立てて遊びを楽しんでいた。(協同性・自然との関わり・言葉による伝え合い)

落ち葉でスープを作ろう！赤い葉っぱだから、赤になるはずよ。



じゃあ、黄色い落ち葉も入れてみよう。そしたら色変わるんじゃない？

ホテイアオイを入れてつぶしたら、透明な汁が出てくる。へんなの～



どろどろ～混ぜるの大変だよ。なんか匂いもする。

なんかチョコレートみたいね

花は色水にするとそのままの色が出るものが多いが、落ち葉や水草などは見た目の色と違う汁や色が出ることに気づいて驚いていた。種類によっては粘り気があり「ねちゃねちゃするし、くさい」「なんかどろどろ」など違いにも気づいて、様々な草花を試して遊ぶ姿が見られた。

だんだんと植物に興味が出てきた！このまま、遊びが発展してほしい。色水遊びの出来る環境を整えていきたい。

(3)4月25日

年中クラス側の花壇に花の球根や種を自分たちで穴を掘って植えた。「大きくなりますように」と声をかけながら植え、じょうろでやさしく水やりをしていた。(協同性・思考力の芽生え・自然との関わり)

花の赤ちゃん。
ガサガサしてるし、重いし。



いっぱい水ないと枯れちゃうよね。明日生えてくるかな。

植物を自分たちで植えることで、毎日進んで水やりをしたり、観察をしたりと興味を持つきっかけになった。

(4)5月中旬

年中側の園庭に色水コーナーで少しずつ道具が揃ってくると、「なにに使うの?」「このごりごりするの(すり鉢)離乳食作るやつだよね」とすぐに興味を示していた。保護者から家庭で不要になったタッパーなどの容器や製氷皿を提供してもらったため、「これ(製氷皿)氷作るものだよね」「じゃあ、花の氷作れるってこと?やったー」と遊びを想像して笑顔な園児。

様々な花をすり鉢ですり潰し、容器に入れて水と混ぜて遊んでいた。製氷皿に作った色水を入れて、「早く氷にならないかな」「明日は氷も混ぜてジュース作るよ」と明日の遊びを楽しみにしている。

(思考力の芽生え・自然との関わり・言葉による伝え合い)



(すり鉢で)ごりごりするの楽しい～

色水で黄色の氷にしようよ!



ちぎった花も入れたら、めっちゃ可愛いよ♪

色水遊びで使えそうな容器の提供を保護者に声掛けすると、タッパー・製氷皿・コップ・グラス・醤油さしなど様々な容器が集まった。作った色水を容器に移し替えてジュースに見立てて遊んだり、製氷皿に作った色水を入れて凍らせたりと、遊びが広がった。

「明日も色水したいね」と今日の遊びが明日の遊びに繋がってほしいな。

(5) 6月頃～9月頃

色水を凍らせることを楽しむようになり、ビニール袋やビニール手袋、トレーなど様々な物に入れて凍らせて楽しんでた。

でっかいピンクの氷にしたいからさ。花も並べたらかわいいよね



氷と混ぜたら冷たい！もう氷溶けてなくなってきた～



手洗い用に準備していたポンプの泡石鹸を見て、「先生！色水に石鹸も混ぜたい！」と一人の園児が遊び始めたことから、石鹸を使う園児が出てきた。花と混ぜて色付き石鹸を作ってみたり、作った色水に泡を浮かべ、ドリンクに見立てて友達や先生に振舞っていた。

(思考力の芽生え・自然との関わり・言葉による伝え合い)

なんか石鹸が沈まない。ずっと上にあるよ



変なの～。ちよ
うまめなのに青
じゃなくて紫に
なった。



クリームジュースはいかがですか？おいしいですよー



「今日は青色の水作ろーっと」「いろいろな花入れて実験しよう」と毎日色水遊びを楽しむようになってきた。「今日は色水で氷を作って、明日はジュース屋さんになりたい！」「先生知ってる？色水って置いといたら、色変わるんだよ」と明日の遊びに繋がっていった。

(6) 9月後半

お招き会で、沖縄南部で絵画教室を開いている保護者の方を講師に招いて、祖父母と一緒に障子紙染めの製作を楽しんだ。障子紙を小さく折りたたんで水に浸し、様々な色の絵具を自由につけて個性あふれる作品に仕上がった。翌週、お招き会の思い出話で盛り上がる中、「絵具みたいに色水でも出来そう！」と一人の園児のつぶやきから、「やりたい」と興味のある子が集まった。

(思考力の芽生え・自然との関わり・言葉による伝え合い)

お招き会



これまで、コピー用紙、コーヒーフィルター、布はぎれなど様々な物を色水につけて遊んでいたが、満足するほど染まらず、すぐに飽きてしまった。「障子紙なら出来るかも！」という発想から試してみることになった。



すり鉢でゴリゴリするの楽しいけど、手が疲れる～



青がいっぱい。うすいのと濃いのがある。



園外散歩で集めた植物も合わせて14種類の絵具が出来た。

染めるのは慎重に…



黄色い色水でや
ったのにあんま
色出てない…



なんか匂いしたら
くっさーい!!!
葉っぱの匂いだ!



乾かしてみてもびっくり。青色以外はほとんど色味が出ず、落ち込む園児もいた。完成したものをそのまま持ち帰ったり、個人の自由帳に貼ったり、折り紙のように折って花を作り製作にしたりと楽しんでた。

【考察】

・色水遊びを通して自然と関わることで、身の回りの植物に興味を持つきっかけになり、植物を使った遊びの楽しさや驚きへの気づきにつながったと考える。

成果と課題

【成果】

・子ども達は、日頃から園庭の植物を使って色水遊びを楽しんでいる。季節によって植物が変わるたびに発見や驚きがあったり、色水を氷にしたり紙を染めたりと遊び方が無限大で、好奇心や探究心が高まってきた。

【課題】

・色水遊びをきっかけに植物に興味を持つことが出来たが、そこから植物自体への関心・知識を深めることが出来なかった（植物の名前など）。

【まとめ】

・身近な植物を活用した色水遊びから、障子紙染め製作を楽しむことができた。障子紙染め製作の際は、絵の具を使って染めを楽しんだが、そこから遊びが発展して行って、園内外の草花の色水を使って障子紙染めに挑戦した。現在、5歳児が、園庭のレンガを細かく砕いて遊んでいる姿が見られるが、今後、5歳児、小学校と年齢が上がった時に、植物だけでなくこのレンガを細かく砕いたもの、泥水など色々なもので染物ができることに繋げること。また、そこから沖縄の伝統的な染織物である、「紅型染め」「首里織」「琉球緋」、「ウージ染め」について知り、興味関心を持てるような実践を園として継続していきたい。

レンガとレンガをぶつけ
たら、こまくなるよ！
でも、めっちゃ硬い！



砕いたレンガの粉で
ジュース作り！トマト
ジュースみたいでおい
しそう～

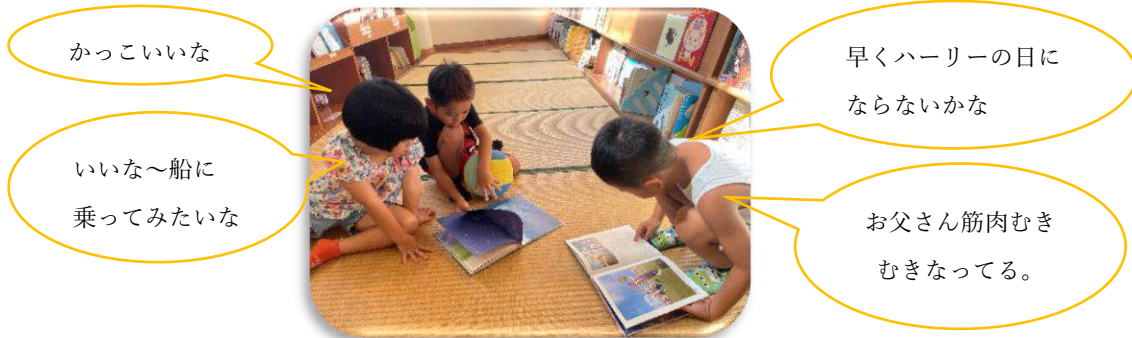
幼児の実態 ・玉城の伝統行事であるハーリーを地域の子ども会でも練習している。
 ・奥武島以外の園児は詳しくは知らない。
 保育者の願い・地域の行事への関心や大事にしていこうという気持ちにつながるといういな。

幼児の姿

近年コロナ禍で地域行事が滞っていたが、4年ぶりに奥武島ハーリーが開催されることで地域の子ども会でも練習が始まった。奥武島に住んでいる園児たちから遊びが始まり製作、ごっこ遊び等様々な遊びに広がった。そこで園児の興味関心を高めハーリー遊びがより広がるために奥武島在住、理恵子先生にハーリーの講話とハーリー見学をお願いした。

(1)6月9日

絵本を広げながらハーリーの話をする園児。今年は4年ぶりに奥武ハーリーが開催することで、楽しみにしている。子ども会でも練習が始まったと友達に嬉しそうに話をする。(言葉による伝え合い)



かっこいいな

いいな～船に乗ってみたいな

早くハーリーの日に
ならないかな

お父さん筋肉むき
むきなってる。

朝の会でもハーリーの練習したことを楽しく発表する園児が増えてきた。練習に参加していなくて情報がない園児には、絵本や大型紙芝居、YouTubeを見せたりして、だんだんとハーリーに興味を示してきた。

「先生も見てみたいな」「漕ぐ練習もしているの」と投げかる。他園児と共有できたらいいな。

(2)6月12日

ハーリー船にみたてた遊びが盛んになる。椅子をたくさん並べ新聞紙を敷いて海にみたてた。イメージを出し合いアイデアを認め自分たちでハーリー船を作る遊びへと繋がっていった。「みんな～船にのっていいよ」と友達を誘い、近くで他の遊びをしていた園児も集まってきた。

(協同性、思考力の芽生え、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現)



ガムテープでとめよう

ここもってて

グラグラするね

椅子はぐらぐらするから難しい

(3)6月13日

T児「椅子は動いて危ないから段ボールでハーリー船作ろう」

Y児「段ボールをくっつけて長くしよう」「部屋がせまくて動かすの難しい」

保育者「かっこいい船つくれたね！広い海でハーリーはやるんだよね、がじゅまるの部屋は広いけど、みんなはどう思う？」

Y児「いいね♪次は広い場所で漕いでみよう～」

S児「※エークをもっていこう」(豊かな感性と表現、言葉による伝え合い、思考力の芽生え、協同性)

ハーリーに興味をもっている仲間が中心となり他園児が集まってきた。



前にすすめ～



部屋がせまい、ぶつかる



出発！進行～！

遊んでいくうちに「先生、ハーイヤッってエイサーだね」等園児は疑問がでてきた。エークの漕ぎ方やかけ声など詳しく押しあげたいな。

(4)6月16日

奥武島に住んでいる中村理恵子先生が頭に鉢巻を巻いて鐘をカーン、カーン、カーンと鳴らしながらの登場。「観音堂に祭られている仏像様」について話を聞く。(社会生活との関わり)



手の持ち方がむづかしい

サーッサ！サーッサ！

かけ声は「サーッサ」
だったんだね

片手では持てない



舞台でのエークの練習が楽しくて「アンコール、アンコール」と盛り上がりを見せた。講話が終わり質問タイムでは・・・

H児「海はこわくないですか」Y児「落ちてても危なくないですか」

M児「1番になったら賞品ありますか」(社会生活との関り、言葉による伝え合い)

本物のハーリーを見たい！！と盛り上がり実際に見学行くことが決定した♪

楽しかった～毎日練習したいな、またきてほしい。



地域の方への親しみも深まり、楽しい体験を通して新しい遊びがうまれたり深まったりしてほしいな。

(5)6月21日

ハーリー当日、バスに乗り年長児全員奥武島へ移動。「遠足みたい」「みんなで出かけるの楽しいね」と楽しい会話が聞こえる。会場に着くと、これから始まるハーリーにわくわく期待している子ども達。(社会生活との関わり、言葉による伝え合い)



「俺たちも競争したい」「ゴールする場所も決めよう」バスの中では迫力ある姿に感動し興奮している園児が、ハーリー船の勝負をしようと話し合う姿が見られた。

自分の住む地域の行事への関心や大事にしていこうという気持ちにつながるといういいな。

(6)6月22日

園児がいつでも遊べるようにハーリー船は手に取りやすい場所に置いてある。T児、S児「ハーリー勝負したい人！中庭に集まって～」と子ども同士で声を掛け合ってチームやゴール場所を、話し合いで決めていく姿が見られた。周りで見ている子には「応援していてね」と声をかけ、また他のクラスの園児が「いいな～仲間に入れて～」と集まってきた。チーム変更をしてクラス対抗戦に発展した。(健康な心と体、自立心、協同性、言葉による伝え合い)



ハーリー船を製作し部屋に置いていたが、奥武ハーリーを見学し、友達と勝負したい気持ちが出てきた。「外で競争楽しい」「エークはないけどハーリーみたいで面白い」満足している姿が見られた。

遊びと並行して園児とドキュメンテーションを作成して掲示した。



園児が吹き出しにコメントをかくことで思いが直球で伝わってきた。折り紙や絵を描いたり保育者が作成するドキュメンテーションより楽しい雰囲気が伝わり、園児の振り返る時間が増えた。(言葉による伝え合い、豊かな感性と表現)

(7)6月28日

2、3人の園児が、自由画帳にハーリーを描いている姿を見て「大きな画用紙にもっともっと大きなハーリー船を描きたい」と周りにいた園児も集まってきた。クラスだけでなく伸び伸び描けるように大広間(がじゅまる)を使った。(豊かな表現と感性)



暑かったからキラキラ太陽かこう。



おれのお父さんかっこよかったな～

「船にたくさん大人がいたよね」「お祭りみたいだった」と意欲的に取り組み、伸び伸び表現する姿が見られた。

(8)6月29日

毎日夏野菜を収穫する園児。昨日描いた絵に『野菜スタンプ』が始まると予測した。畑にいる園児から「今日はオクラがたくさんとれたね」「大きなオクラはスタンプにしよう」と自分のイメージしたことを友達に言葉で伝え合う姿が見られた。

(豊かな感性と表現、言葉による伝え合い、数量や図形への関心、思考力の芽生え、自然との関わり)

絵が苦手な園児もスタンプ遊びをしながら楽しく描いていた。



どんな模様にしようかな

かんせ～い♪



その色いいね

2つまぜたよ



真似していい?

いいよ♪

『おくら』がいっぱい。大きいのはスタンプしたい。

これからも身近にあるものを使って工夫し遊べたらいいな。
経験したことが今後の遊びや自信につながりといいな。

(9)7月上旬～7月下旬

段ボールでハーリー船を作って遊んでいた園児から「大きな段ボールで秘密基地を作りたい」「めっちゃ大きな海賊船も作ろう」と子ども達同士で話し合いが始まった。

(健康な心と体、協同性、思考力の芽生え、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現)



冷たくて気持ちいい

「段ボールに色をつけて可愛くしたい」と絵の具を使って思い思いに遊びこみ充実感を味わっている。



【考察】

・玉城の自然環境と奥武島の伝統行事に十分に知り心動かせる体験をすることで、充実感や感動を味わい様々な気づきにつながったと考える。

成果と課題

【成果】

- ・奥武島に住んでいる園児が子供会を通してハーリーの練習し、興味関心を持ち他園児に遊びが広がった。
- ・奥武在住の先生が講話することで園児の興味、関心が深まった。
- ・友達同士関わりながら色々なアイデアが生まれ、夢中になって遊ぶころにつながった。
- ・クラスでドキュメンテーションを作成したことで、一緒になって考え楽しみ振り返る時間をつくれた。

【課題】

- ・保育者がアンテナを高くして子ども達が地域文化に対してどの様に興味関心を持っているのか、声を拾い遊びに展開する。



【事例2の考察】

- 玉城の自然環境と奥武島の伝統行事に十分に寄り心動かせる体験をすることで、充実感や感動を味わい様々な気づきにつながったと考える。
- 奥武島に住んでいる園児が子供会を通してハーリーの練習し、興味関心を持ち他園児に遊びが広がり、ハーリー競争や海賊船作り等へ発展し遊びこむ姿につながったと考える。
- 絵本やユーチューブの活用、奥武在住元職員の講話、ハーリー見学等をしたことで園児の興味、関心が高まり、遊びが深まったと考える。

成果・課題・改善策

【成果】

- 園児や保育者が地域や園にある自然物に目を向けるようになった。
- 友達同士関わりながら協力したりアイデアを出し合ったりしながら夢中になって遊ぶようになった。
- クラスでドキュメンテーションを作成したことで、一緒になって考え、楽しみ、振り返る時間を共有したことでさらに遊びが深まった。

【課題】

- 保育者間で事前に地域文化に対する子ども達の興味や関心を捉える必要があった。

【改善策】

- 保育者がアンテナを高くして、子ども達が地域文化に対してどの様に興味関心を持っているか把握する。
- 保育者が地域の自然や文化に目を向け、保育実践への活かし方を更に学んでいく。



『ちょうちょになって』

令和5年度

知念こども園 3歳児～5歳児

実践者：中本絹枝、新垣紗希、仲村隼、當眞真依子、上地奈菜香、宮平希、
高橋美希、知念洋子、仲田朋弘、與儀和歌子、熊田紫香

【テーマ】 地域文化継承における幼児教育

【目的】 知念地域の自然を感じ地域の文化に興味・関心を持ち
自分なりの表現をする

知念こども園の子ども達は、園庭に集まるオオゴマダラ等を捕まえて、卵から幼虫、蛹と成長していく様子の段階を発見をしながら、不思議さや育てる楽しさを感じている。この経験をこれから教諭がねらいをもって意図的な遊びの展開を広げることが重要であると考え、今年度は表現を意識し、どのような表現遊びを展開するか子ども達と共に保育を創り出していきたい。



【昨年の取り組みの振り返りから】

最初に導入の仕方やきっかけづくりを職員で話し合い、子どもが興味や関心を持ってくれるようにということを前提に取り組みを始める。子ども達が蝶々に興味・関心を持ったところで『胡蝶の舞』のDVDをみんなで観る。そこから子ども達がどのような遊びに発展させていくのかを、予想したり環境の準備をしたりすることを意図して保育をするようにした。『胡蝶の舞』を観た後は、子ども達が蝶々の羽づくりをしたり、動きを真似る子が出たり、ゲームに蝶々のイメージをくっつけたりして遊ぶ姿が見られた。

1年目の取り組みとしては、子ども達の遊びの発展を見ることができた事と、導入の仕方やタイミングなどで子どもの注目や興味が変わるといふ事、そして子どもの遊びの発展などを予想していろいろな準備をすることの必要性などをとても感じた。

【昨年の取り組みから今年の取り組みの構想】

昨年の取り組みの中で、遊びの発展も見られ、『胡蝶の舞』のDVDを観て動きを真似る子はいたが、踊りを真似て楽しむ子が少なかったという話が出る。今年は踊りを真似たり、自分達で蝶々をイメージして、踊りを創作する子が出てこないかなと考えた。また、卵から幼虫、蛹、蝶々などの子ども達が踊りなど表現を楽しんだことができるといいなと考えた。その為には、その成長の過程を実際に見ることができたら子ども達にとっていい経験にもなり、イメージして表現しやすくなるのではと思ひ、そうなってくれるといいなと考えていたが導入のタイミングや方法がなかなか定まらなかった。

〈エピソード 1〉 たまごを産んだよ！

5歳児クラスのKくんが園庭でオオゴマダラの蝶々を捕まえた。一度は家に持って帰るが次の日、園で蝶々を育てたいと持ってくる。虫かごでは小さくてかわいそうということで、園にあるかごを出すか、それでは逃げてしまう。「じゃあ、網をかけよう」などいろいろ考えて蝶々の家が完成！（昨年のはかごにビニールをかけ、穴をあけていた。）そこに蝶々を入れると一緒に入れていたホウライカガミの葉っぱに卵が30個産まれていて皆で喜ぶ。



これなら逃げないよね！

捕まえたちょうちよがたまごを産んだよ。さあ、みんなで育てよう！

卵から蝶々を育ててみたいという子どもの声を聞き、園で育てていく為の『やくそくごと』を5歳児クラスが話し合うことに。みんなが成長を見れるように設置場所は玄関ホールの畳スペースに決定。また、いろいろとお家で調べてきた子が蝶々の名前、好きな花や葉っぱは何かなどをみんなに教えてくれた。玄関ホールに設置することで、子ども達だけでなく保護者も観察したり子どもとの話のきっかけになった。

〈エピソード 2〉



見てみて～。はっぱに
いくつたまごがついて
いると思う？

白いのときいろいのか
いろんなのあるね～。



卵が孵化して幼虫になる。孵化したての幼虫はとて
小さくて白いことに子ども達も職員もびっくり。

「幼虫に黒と白の模様が出て
きたよ!」「なんか赤い点々も
出てきた～!」毎日、子ども
達が発見していく。



「お母さん見て! 僕が捕まえたオオゴマダラのちょうちょだよ!」

4歳児のGくんがオオゴマダラを捕まえ、この蝶々も卵を産む。この卵は4歳児クラスで育てることに。4歳児クラスにはオオゴマダラだけでなく他の蝶々も卵から蝶々まで育てることに。

〈エピソード 3〉 幼虫が大きくなるにつれ・・・

葉っぱをよく食べるうちをたくさんするので、虫かごの中はすぐに幼虫のうんちでいっぱいになる。子ども達から「虫かごを掃除してあげる」という声が出てくる。



やさしくつかんで
あげてね!!

まずは、1匹ずつ
幼虫を外に出すんだ。



全部移したから、虫かごの中のうんちを捨てて、きれいに拭いてあげよう。



うんちたくさんしたら、お腹すくよね。
ハウライカガミの葉っぱをあげよう!!

幼虫がだんだん大きくなって、いつでもさなぎ
になれるようにと幼虫を虫かごから大きめの
ゲージに移動させることに。



幼虫大きくなったね～。そろそろさなぎになるかなあ～。
いつでもさなぎになれるようにしてあげよう!





〈エピソード 4〉 幼虫がさなぎになったよ！

ある朝、早めの登園をしていた子ども達と職員が幼虫が蛹になるところを目撃！

この黒いのを落とそうとしてる～。ぷりぷり動いてる。あと少し～がんばれ～！！(動画あり)



登園してきた子ども達は、きれいな金色の蛹に大興奮。保護者の方も、初めて見る方もいて子どもだけでなく保護者の方も興味津々。幼虫の時は「こんなにあると気持ち悪い～」と言っていた保護者の方も「あの幼虫がこんなにきれいな蛹になるんだね」と驚いていた。

〈エピソード 5〉 落ちてるさなぎを助けたい。



たくさんの蛹の中で、ひとつの蛹が下に落ちていることに気づいたKちゃん。「かわいそう。つけてあげたい」といろいろ方法を考える。「糸でつける」「難しい」いろいろ考えた結果、洗濯ばさみでつけることに。ただ、まだやわらかい蛹を洗濯ばさみではさんでつけるのは大人でも難しく、結局少し潰れてしまい育たなかったが、Kちゃんの気持ちは嬉し汲み取ってあげたい。



〈エピソード 6〉 ちょうちょを逃がそう！

蛹から出たばかりの蝶々は羽が濡れていて、羽もびんとしていないのですぐには飛ぶことができないなど、いろんなことに気づいた子ども達。飛ぶ準備ができた蝶々達を逃がすことに。オオゴマダラのひらひらと舞う優雅な飛び方を見てほしいという思いから、遊戯室に13羽逃がしてひらひら舞うのを見た後、窓を開けて外へ逃がした。



園として、オオゴマダラを卵から蝶々になるまでの過程をみてきたのと同時進行で、4歳児クラスでは虫が大好きな子が多く、いろんな蝶々の卵を見つけては孵化させて蝶々することに成功。知念こども園の園庭には、いろんな種類の蝶々がいる、それぞれ卵から幼虫、蛹から蝶々になるまでの過程を見て、最後はクラスのテラスから蝶々を逃がすということを何度も経験することができた。クラスにはいくつかの虫かごと図鑑が用意されている。子ども達が図鑑をひろげて、いろいろ調べようとする姿もあった。



〈蝶々を育て、逃がすという経験をした子ども達の製作表現〉



5 歳児の蝶々の絵の表現
 4 歳児の蝶々の粘土の表現
 それぞれが好きに表現している。
 蜜を吸っている蝶々、飛んでいる蝶々、卵や蛹と蝶々、みんなで逃がした蝶々など、それぞれが印象に残っている蝶々を自由に表現している。その他、塗り絵をしたり
 いろいろな製作を通しての表現を楽しむ。

【園内研修での職員の話し合い】

- ・オオゴマダラの蝶々を卵から育て逃がすという体験をしたタイミングで、すぐに職員での話し合いが持てずにうまく子ども達に導入することができなかった。そこで、今からどういう風にまた子ども達と蝶々の表現に取り組んでいけるかを考える。
- ・蝶々を育て逃がしたタイミングで各クラスで絵を描いたり、粘土で蝶々を作ったりすると子ども達それぞれのイメージで思い思いのものができた。
- ・表現と言ってもいろんな表現があるので、幅が広すぎて難しいということだったので、身体で表現するというのはいかがでしょうかということになった。
- ・「胡蝶の舞」を真似するのではなく、知念こども園の「蝶の舞」を子ども達が創作してくれたら一番すごいねということになった。これを最終のねらいとする。すぐに踊りというのは難しいので、まずは子ども達がイメージをどんな形でもいいので身体で表現してくれたらいいということになった。

〈地域文化継承について〉

目的・・知念地域の自然を感じ地域の文化に興味・関心をもち自分なりの表現する
 ・今までの話し合い
 オオゴマダラを捕まえて、卵から幼虫、蛹と成長の段階を発見をしながら、不思議さや育てる楽しさを感じることができた。
 ・この経験をこれから教諭がねらいをもって意図的なあそびの展開を広げることが重要である。(今年では表現を意識していく)
 ↓
 ・どのような表現遊びに展開してけるか？

・現在、リズム運動で『ちょうちょ』があるが曲調もゆっくりで優雅な動きなのでオオゴマダラの飛び方に似ているという話になったが、ある子が蝶々の羽をパタパタさせているので本人に聞いてみると「アゲハとかは、羽を動かすの早いんだよ」と言っていた。

オオゴマダラを卵から蝶々にしたことで、職員のなかでも蝶々＝オオゴマダラという意識になってしまっていたが、4歳児クラスではいろんな蝶々を育て観察する中で蝶々にもいろいろあって、飛び方もそれぞれ違うということに気づいて、自分なりに蝶々の動きをイメージしているはずという話が出る。その違いに子ども達が気づいたということもすごいし、それならそれぞれのイメージを自由に表現させてあげたいねということになった。

リズム運動としては、曲に合わせてしなやかな動きを身につけて欲しいというねらいがあるので、そこは自由に表現というわけにはいかない。では自由な発想とイメージで表現をどうさせていけばいいのかという課題が出てきた。まずは音楽もなしで子ども一人一人が持っている蝶々のイメージを聞き出し蝶々になりきることで表現できないかと考える。

〈4歳児クラス 蝶々の表現あそび〉

クラスの蝶々が羽化したタイミングで、5歳児の男の子が4歳児の女の子に「ちょうちょってこんなして飛ぶんだよ」と飛び方をみせていた。そこで担任が「ちょうちょってどんなしてとぶの?」と問いかけると、それぞれが自由にイメージしてやってみせた。蜜を吸ってる蝶々、休憩している蝶々、卵を産んでる蝶々、などいろんな蝶々になりきっていた。

その日の午後、ある女の子がハンカチを2枚持ってきて「結んでほしい」と言うので「何をやるの?」と聞くと「ちょうちょの羽を作る」と言う。その結んだハンカチを羽に見立てて遊んでるうちに、丸まって卵、幼虫、蛹、蝶々とハンカチを使って成長の過程を表現していた。その後、羽をチラシで作る子、タオルを使って表現する子などそれぞれが自分の思い思いになりきり、イメージを表現して遊んでいた。



〈卵〉



〈幼虫〉



〈蛹〉



〈蝶々〉



ハンカチを蝶々の羽に見立てるだけだと思っていたら、そのハンカチを使って卵から幼虫、蛹から蝶々と成長の過程をすべて表現したことにとっても驚いた。

大人が考えつかないことを、子ども達は考えたりひらめいたりすることを体験している。こういう感性を大事にしたいと思った。

〈5歳児クラス 蝶々の表現あそび〉

どんな風に子ども達と表現遊びをするか5歳児のクラス担任で話し合い、今までのクラスで蝶々を捕まえてその蝶々が卵を産んで・・・蝶々を羽化させて逃がすという体験したことを子ども達と一緒に振り返り、その後『はらぺこあおむし』の歌なしの音源を使ってやってみようということになった。

子ども達と蝶々を捕まえた時の話からしていくと、「あれはKが捕まえたんだよ」「そしたらひとつの葉っぱにいっぱい卵産んだよね」など子ども達も思い出しながらどんどん言葉が出てきた。中でもなぜオオゴマダラがあんなに優雅にゆっくり飛ぶのかを知っている子が、みんなの前に立ち「ホウライカガミの葉っぱには毒があって、それを食べるオオゴマダラも毒を持っているから、敵に狙われないんだよ。だからゆっくり飛んでも大丈夫なんだよ。」と伝えていた。

ひと通り、振り返りが終わった後『はらべこあおむし』の音源をかけてみるとどんな風にしてと言わなくてもそれぞれが思い思いに卵になり、幼虫になる。お腹がすいたと一人の幼虫(子)が部屋の中の黄緑のカラービニールを食べる真似をすると他の子たちも黄緑や緑を探しお腹いっぱい食べる。そして蛹の場面では一人が蛹になる子や、何名か連なって大きな蛹になる子ども達もいる。蝶々になった子ども達も部屋を飛び出し遊戯室で蝶々になりきり飛んでいた。自分たちの実体験と『はらべこあおむし』の音源とストーリーが重なってクラスみんなで表現あそびを楽しむことができた。



〈蝶々を育てたことを
みんなで振り返り〉



卵って丸かったよね



お腹すいた！食べるもの探そう！



大きな蛹



蛹になって眠るのよ



蝶々になってとぶぞお～

〈蝶々の表現あそびを楽しんだので『胡蝶の舞』の導入〉

蝶々を育てたり、蝶々の表現あそびを各クラスで楽しんだのでそろそろ子ども達に『胡蝶の舞』を見せたいということになった。今年入った職員(5歳児担任)が知名部落の青年会に入り、『胡蝶の舞』を踊ることになったので、ヌーパレー当日の朝にその職員ともう一人青年会の人がかども園に来て、衣装を着て子ども達の目の前で踊ってくれることになった。

その前に一度DVDを観てみようということで、全員で観る。4・5歳児は昨年観ているが3歳児は初めて。DVDを観た後「J先生が今度、この『胡蝶の舞』を踊るんだよ」という紹介をすると、子ども達から「すご～い」の声が。J先生が少し踊りを見せると子ども達は目をキラキラさせて見る。

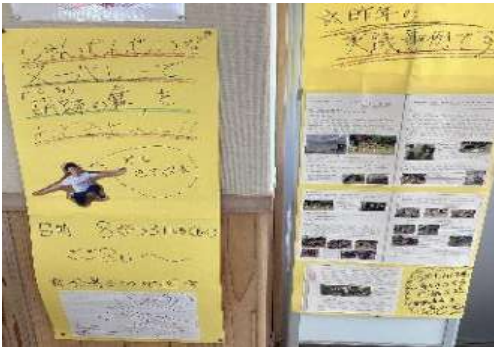
その後も、5歳児クラスの子供達は遊戯室で『胡蝶の舞』をJ先生と一緒に真似て踊ったり、少しアレンジしたりして何度も踊って楽しんでた。



蝶々、こんなんだよね～

〈知名部落のヌーバレーを保護者に情報提供〉

昨年、ヌーバレーが終わってからの取り組みだったので生で見ることも、『胡蝶の舞』という踊りがあるということもあまり保護者に知らせたりすることができなかったのが昨年の課題でもあった。今年、5歳児担任の先生がヌーバレーで『胡蝶の舞』を踊るので、玄関に貼りだした。



案内を張り出すと、送迎の時に子どもたちが保護者に「見に行きたい〜」「J先生が踊るんだって」と伝えたり、知名部落の保護者の方から「小学生がエイサーするので見に来てください」など情報交換もできた。

職員がヌーバレーで『胡蝶の舞』を踊るということで、子ども達の関心や興味もとてもあり大好きな先生と一緒に楽しみたいという気持ちがあるので子ども達ものりやすい。

〈知名青年会による生の『胡蝶の舞』〉

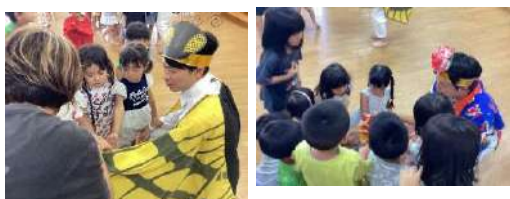
ヌーバレー当日、青年会の方たちに『胡蝶の舞』を園で見せよう。J先生も踊るということで子ども達も朝からとても楽しみにしていた。知念あさひ保育園や保護者にも声をかけたので、知念こども園だけでなく同じ地域の保育園の子どもたちや保護者も一緒に見る事ができた。青年会の人衣装を着て登場した時は、子ども達から拍手と歓声が上がる。踊りがはじまると、みんな食い入るようにして観ていた。踊りの後は質問コーナー。子ども達から質問や感想がたくさんできた。



とってもきれいで、かっこよかった！楽しかった！！



何でそんなに上手に踊れるんですか？



最後に衣装を近くで見たいということで、子ども達がそばに行く。触らせてもらったり話をしたりする時間もあり喜んでた。青年会の人たちも自分たちの舞を地域の子も達知って憧れられているというのは嬉しかったのではないと思う。

〈ヌーバレーを終えて〉

知念地区では、知名部落だけでなく安座真部落、久手堅部落の3つの部落でヌーバレーが行われている。当日、子ども達や職員も各部落のヌーバレーを見に行った。胡蝶の舞だけでなく他にもいろいろな伝統の文化がたくさんあると感じた。

ある園児のお迎えに来た祖母が、「知名だけじゃなく、うちの部落にもこんな踊りがあるんだよ」と教えてくれたので「今度、是非子ども達に見せてください」というと「いつでも」という話になった。今回は胡蝶の舞での取り組みではあるが、もちろん地域文化はそれだけではないので、このように保護者の方や地域の方から声をかけてもらえることも嬉しく思う。

こんなふうに、もっと地域とつながっていったらいいなと感じた。

〈お招き会にて〉 9月13日 ・ ・ 動画あり

祖父母を招いてのお招き会の中で、「地域文化継承における幼児教育のテーマで昨年から取り組んでいる」ということと、「5歳児担任の先生が先日のヌーバレーで踊って、その影響で子ども達も少し胡蝶の舞を真似して踊る子も出てきています」ということで急遽、音楽をならし先生と一緒に踊ることに。練習は一度もしたことがなかったが、子ども達は先生と一緒にとても楽しそうにとっても上手に踊っていた。何度も何度も見たわけではないのに、子ども達の中にこんなに踊りが入っていることにとても驚いた。



〈5歳児らいおんぐみの話し合い〉 9月21日 ・ ・ 動画あり

運動会で何をやりたいかの話し合いの時に「胡蝶の舞もやりたい」という声が出てきた。

ヌーバレーから少しはっていたので、もう一度踊りを見てみようということになり、先日青年会の方が来て踊ってくれた時のビデオをスクリーンに映してみんなで見た。見ながら踊ったり、お友達と楽しそうに見ていた。みんなで見ただけで、子ども達に感想を聞く。



- ・とってもかっこよかった
- ・足がすごかった
- ・楽しかった
- ・きれいだった
- ・蝶々かっこよかった

・どうしてかっこよく
踊れたんだろう？

- ・いっぱい練習したからだと思う
- ・できると思ってやったから
- ・心がきれいだから

・なんできれいだった
んだろう？

- ・勇気があるから
- ・やさしいから

〈踊ってみよう〉

みんなで踊ってみよう！ということになったが、遊戯室が空いていない。さあどうしよう！と子ども達に投げかけると「グループになって、見せ合いっこしよう」ということになった。それでもスペースが狭いので「だったら、テーブルをどかせばいいじゃん」と子ども達で考え、それぞれ力を合わせてテーブルを廊下まで運んであつという間に踊るスペースを確保した。



4つのグループに分かれて見せ合う。見せ合う順番も子ども達が決める。J先生も観客になって、子ども達だけで踊る。子ども達がそれぞれどんなだったのかなあと考えながら、思い出しながら踊っていた。

〈J先生と踊ってみよう〉 9月29日

前回子ども達同士で見せ合いをした時、あんな動きだったかなあと思い出しながらの踊りだったのでそろそろ子ども達に「胡蝶の舞」を教えてみたらどうかということになった。

一度、ちゃんとした踊りを教えることで自信を持って踊れるようになったり、子ども達同士で教え合ったりするのではないかと考えた。

J先生が、胡蝶の舞の踊りを分かりやすく説明しながら伝えると子ども達もどう踊ればいいのかも分かってきたようだった。ただ動きを何となく真似して踊るという踊り方から、足や手をどうすればいいかなどと少し動きを意識するという動きに変わっていった。



〈踊ってみてどうだった？〉

「先生と踊ってどうだった？」の問いかけに「楽しかった」「足が疲れた」など意見が出た中、「もっときれいに踊りたい」という子も。「もっときれいに踊るにはどうしたらいいかな？」と聞くと「いっぱい練習する」や「ちょうちょの羽を作る」という声があがる。

それぞれが自分の蝶々の羽を作ることに。「じゃあ、みんなで羽をつけて胡蝶の舞を踊ろう会をしてみない？」と提案すると「さんせい〜！」「やりたあい！」「楽しみ〜！」と子ども達。

『胡蝶の舞を踊ろう会』の日を決めて、それまで数日あったので作るタイミングは自分で決めて衣装づくりがスタート。



ねえ、大きさこれでいいかな？

ここからどんなする〜？

切りたいからそっち持っててね〜！！

〈胡蝶の舞を踊ろう会〉

子ども達が楽しみにしていた『胡蝶の舞を踊ろう会』当日。「今日、ちょうちょの羽つけて胡蝶の舞踊るんだよね」「楽しみ〜」と登園時から子どもたちのわくわくしている様子があった。

自分で作ったそれぞれの蝶々の羽をつけて、みんなで『胡蝶の舞』を踊る準備から。

羽をつける段階で破れたり、壊れたりすることもあるはずと、修正がすぐできるようにテープやガムテープなどを準備しておく。案の定、何名か破れたりせまいなどで手直しする子がいたが、準備をしていたのですぐに直すことができ、みんな羽をつけることができた。

そして、初めて蝶々の羽をつけてみんなで『胡蝶の舞』を踊ることができた。



〈蝶々になりきって遊んでみよう〉

胡蝶の舞を踊った後、蝶々の羽をつけたまま遊んでみようということになり、子ども達に聞いてみると4つほど候補が出て、最近子ども達のはまっている「だるまさんがころんだ」になった。

でも、「だるまさんじゃないよね」という話になり、掛け声をみんなで考え『ちょうちょがわらった』に決定。蝶々の羽をつけたまま何度も「だるまさんがころんだ」の『ちょうちょがわらった』バージョンを楽しんだ。



〈運動会で胡蝶の舞〉

今まで胡蝶の舞を踊ることを自分達で楽しんでいましたが、保護者の方に披露するのは初めて。自分達で楽しむだけでなくいろんな人に見てもらって褒めてもらったり感想を聞くことも必要だなと感じた。運動会当日は、それぞれが作った蝶々をつけて楽しそうに踊っていた。運動会でも胡蝶の舞を踊ってその後、『ちょうちょがわらった』を楽しんだ。



〈考察・まとめ〉

昨年と同様、『胡蝶の舞』を題材にし、昨年はどう遊びに発展するかをみたが、今年は子ども達がいろいろな表現を楽しむということをテーマに取り組むことにした。

「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿(10の姿)」の「豊かな感性と表現」では、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」としている。

今回、「感じたことや考えたことを自分なりに表現する」ということ、そして子ども達が「主体的に表現を楽しむこと」を大事にして取り組むようにした。

子どもが捕まえた蝶々が卵を産み、そこから幼虫になり蛹になり、蝶になっていくという過程を園児も保護者も一緒に見るのができた体験から、お絵かきや粘土や工作の製作表現を楽しんだ。また卵から蝶になっていく過程を形態模写をしたり、音楽に合わせてそれぞれが表現遊びをしたりした。いろいろな表現遊びをした後、部落の青年会に入っている5歳児の担任に、『胡蝶の舞』の踊りを少し見せてもらうことで、今年は先生と一緒に踊りたいという子がたくさんでできた。最初はそれぞれが思い出しながら自由に踊っていたが、自信をもって踊るためにはちゃんとした振りを教えることも必要ということで、踊りを教えることにした。すると振りを知ったことで、自信をもって踊ることもでき踊りを楽しむようになった。そこから運動会でも踊りたいということで、それぞれ思い思いの衣装も作り初めてたくさんの保護者の前で『胡蝶の舞』を披露することができた。表現を楽しむだけでなく、人に見せるということで、もっときれいに、もっとかっこよくという気持ちが出てきて何度も踊る姿も見られた。披露して、それをいろんな人に見てもらい褒めてもらうことも子どもたちの喜びとなっていた。

今回の取り組みで、日常生活の中での様々な体験、文化から感じ取るものやその時の気持ちを友達や保育教諭等と共有し、表現しあうことを通して、豊かな感性を養うようにすることが大事だということ。子どもが主体的に表現活動に参加できる「環境」や「教材(題材)」を設定することが、「自分なりに表現して楽しむ」ことを引き出したりすることにつながるのだと感じた。

『おいこみりょうってなに?』 久高幼稚園 3歳児～5歳児（6月～9月）

【テーマ】地域文化にふれる幼児教育

【目的】地域とつながる子どもを育てたいという願いを持ち、保育者自身も地域のことを一緒に学んでいき保育実践（遊び）の質を高めていくことを目的とする。

【職員での導入の話し合い】

- ・ 追い込み漁は、地域の伝統行事でもあり、学校行事の1つでもあるので、地域の方だけでなく、保護者、小中学生とも関わりながら地域の文化について知ることができるといった。
- ・ 子ども達の中から追い込み漁についての話が出てくることがあり、行事の前から追い込み漁に興味関心を示している姿が見られた。行事を通して地域のことを知り、さらに遊びに取り入れることができないかと考えた。

【導入のきっかけづくり】

- ・ クラスでのひとときの際などに、久高島の伝統行事である追い込み漁について話をした。昨年度追い込み漁を経験した子と初めて経験する子、島出身の子など追い込み漁についての知識や経験に差があったが、みんなで共有することで、初めて経験する子も興味を示していた。
- ・ 地域の方による追い込み漁の歴史、海の危険生物に関する話を聞いたり、魚のさばき方を見学したりなど小中学生と一緒に、追い込み漁までの活動に参加した。

〈エピソード1〉

久高島では、島の伝統行事の「追い込み漁」がある。島の方から追い込み漁についての歴史や、海の危険生物についての話を聞いたりして、小中学生と一緒に追い込み漁までの活動に参加した。その中で、園生活の中でも追い込み漁に関する話をする姿が見られるようになってきた。

今まで追い込み漁に参加したことある子もいて、どこで、どのように行われるのかなどを友達に教える姿も見られた。ある日、子ども達の中から、「追い込み漁は、ピザ浜でするんだよ。」「そうなんだ。ピザ浜行ってみたいいな～」という会話が聞こえてきたので、ピザ浜まで散歩に行くことにした。

初めての経験や場所に対して苦手意識があり、「追い込み漁嫌だ～。」「怖い。」と言っている子もいたが、ピザ浜で友達と一緒に楽しく遊んでいた。



・ 海の生き物や、きれいな貝がらなどを見つけ、喜んでた。



・ 不安定な岩場も、歩きやすい場所を探しながら真剣な表情で歩いている。年少組の子も、年中・年長児が歩いていく姿を見て、一生懸命歩いたり、助け合ったりする姿が見られた。



【追い込み漁当日】

追い込み漁について、少しずつ分かってきて興味関心を持ち始めている様子だった。追い込み漁当日は、小中学生や保護者、地域の方と一緒に行事に参加した。

どのように追い込み漁が行われるのかということを知り、漁が行われる場所まで不安定な岩場を歩く。事前にピザ浜に散歩に行っていたので、怖がらずに、楽しみながら歩いていた。

漁が始まると幼稚園生は、浅瀬の方で追い込み漁が行われている様子を見ながら、水遊びを楽しんでいた。漁が終わると、地域の方や保護者、小中学生と一緒にうろこ取りを体験した。また、魚をさばいたり調理したりして、実際に頂いた。追い込み漁という伝統行事を通して、島のことを知るきっかけになるだけでなく、地域の方や小中学生と関わったり、生き物の命に感謝し食べ物を大切にすることが育ったりしている。

地域の方にうろこ取りの仕方を教えてもらい、実際に体験している。



捕れた魚を見て、「大きい!」「沢山いるね♪」などと友達や保護者、地域の方と会話している。

小中学生がうろこ取りをしている姿を見て、「うろこ取りしたい。」と言い、教えてもらっている。



〈追い込み漁の後の子ども達の様子〉

実際に海に入って漁をしている姿を見ることはできなかったのですが、「海の中に入って見たかったな〜」という声も聞こえた。

○追い込み漁をしている様子の動画があるので、それを見ることで、追い込み漁についてさらに深く知ることができるのではないかと考えた。

【遊びの発展】

・子ども達は、捕れた魚や調理された魚を見ることはできたが、魚の様子は遠くからしか見ることができなかったので、動画で追い込み漁の様子を見ることにした。



「○○のパパだ！」と言いながら嬉しそうに動画を見ている。

海の中まで見ることができ、実際にどのように漁をしているのか分かったようだった。



兄弟や保護者、地域の方など子ども達が知っている人が追い込み漁をしている様子に興味を示し、何度も繰り返し追い込み漁の様子を動画で観ていた。

・動画で追い込み漁の様子を見て、「先生大きな紙ちょうだい。」「船の絵描きたい。」と言い、海や魚、船など思い思いの絵を描いて表現していた。



追い込み漁のときの様子を絵に描いて表現している。「赤と白の船だったよ。」「お魚も描こう。」と言い、追い込み漁のときを思い出しながら描いている。



友達が絵を描いている様子を見て、周りの子も絵を描き始めた。「魚が沢山いたね。」「見て見て！いっぱい魚描いたよ。」などと言いながら、思い思いに表現している。



○子ども達のイメージが広がるように海に見立てて、ブルーシートを敷いた。そうすることで、「海だ～」と言い、描いた絵を置き始めた。

自分が描いた絵を見て、「この船作ってみたい。」と言って段ボールを使って船作りが始まった。これまでの園生活の中で様々な素材を使って製作遊びを楽しんだ経験があったので、材料や用具、作り方を考えて絵を見ながら船作りを楽しんでいた。

最初は、1人で作っていたが、徐々に周りの子も興味を示し始め、みんなで協力して作っていた。



描いた絵を見ながら、どのように作るか、一生懸命考えている。

○子どもが考えている様子を見守りながら、教師も一緒に船作りを楽しむ。



周りの子も興味を示し、一緒に作り始めた。「ここ切ってちょうだい。」「いいよ。どうやって切る？」などとイメージを伝え合いながら、協力して一つのものを作っている。



○子ども達がイメージしたものを作ることができるように、材料や用具を準備しておいた。



3歳児の子に5歳児の子が作り方を教えるなどして、みんなで一つのものを作って楽しんでいる。

○全員で追い込み漁に参加することができたので、興味を示し、遊びにつながったと思う。



子ども達にとって船は、身近な乗り物なので、「ここから乗るんだよ。」と言って普段乗っているフェリーのように作ってみたり、船員さんになりきって、やりとりを楽しんだりしている。

・捕まえた魚を入れるバケツと氷を作っている。



○「追い込み漁の時他に何があったかな?」「どうやって追い込み漁してたかな?」など子ども達が思い出しながら遊びを深めていけるような言葉かけをした。

「魚捕ったらバケツに入れるんだよね。」「そうだよ。氷も入れるんだよ!」「捕まえた魚を入れるバケツと氷作らないとね。」などと言い、追い込み漁の様子を思い出しながら必要なものを作っていく。

【考察】

久高島は、普段の園生活の中でも地域の方と関わったり、地域の文化や自然に触れたりする機会が多い。その中で、今回の追い込み漁は、行事に参加するだけでなく事前に地域の方から話を聞いたり、追い込み漁がおこなわれる場所に行ったりしたことでさらに子ども達が地域の伝統行事に興味を持つきっかけになったと思う。さらに、追い込み漁の後に動画を見たり、追い込み漁について話をしたりする場を設けたことで、子ども達の遊びにつながっていた。

・今後も地域の方との関わりを深め、子ども達が地域のことについて知る機会を増やしていきたい。また、その経験を遊びや学びにどのようにつなげていくことができるかを考えていきたい。

『めざせ イラブーはかせ！』 久高幼稚園 3歳児～5歳児 6月～12月

【導入のきっかけづくり】

- ・園庭にイラブーの赤ちゃんが来たことをきっかけに、イラブーに興味を示し始めた子ども達。久高島の伝統的なイラブー漁について知ることで、もっと久高島のことについて知ることができるのではないかと考えた。
- ・実際にイラブー漁や燻製をしている地域の方から話を聞いたり様子を見たりすることで地域の方とも関わることができると思う。
- ・イラブーの赤ちゃんが園庭に来た時に、子ども達と一緒にイラブーについて図鑑で調べたり、動画や写真を見たりして、イラブーに関する興味関心を高められるようにした。
- ・島で育った子もいれば、今年度から島に来ている子もいて、イラブーについての知識や興味に違いがあったので、みんなでイラブーについて話す場を設けた。

〈エピソード1〉 あ！イラブーの赤ちゃんだ！

- ・6月頃に、園庭でイラブーの赤ちゃんを見つけ、興味を示している。

へびがいるよ！

これイラブーの赤ちゃんだよ！

イラブーってなに？

パパが海でとってたよ！

初めて見た！

海にいるへびだよ！

- ・保護者がイラブー漁をしている子もいて、イラブーについて教師や友達に嬉しそうに教えている。
- ・初めてイラブーを見た子は、不思議そうに観察したり、友達の話の話を聞いたりしている。
- ・送迎の際に島出身の保護者にイラブーについて話を聞き、海に住んでいると知った子ども達は、イラブーの赤ちゃんを海に返そう！という話になった。

※興味を示していることについて調べるチャンス！

○絵本コーナーや図書館から子ども達と一緒に図鑑を探して、準備をした。



イラブーのこと書かれてないね～

イラブーいるかな？

しましまだったよね

パパだったらイラブーのことわかるはず！

- ・イラブーについてもっと知りたいと思い、図鑑で調べたり、保護者に聞いてみると言ったりしている。

◆みんなでイラブーについて話す場を設けた。

※幼稚園にある図鑑を見るだけでは、分からないことも多いので、実際にイラブーを見せてあげたい。また、地域の方にイラブーについて話を聞く機会を設けたい。

〈エピソード2〉 イラブーはかせにきいてみよう！

○子ども達がイラブーについて興味を示しているので、地域の方に相談してイラブーの燻製をしているところを見に行くことができるように相談した。

・子ども達や地域の方と相談し、イラブーを見に散歩に出かけることにした。

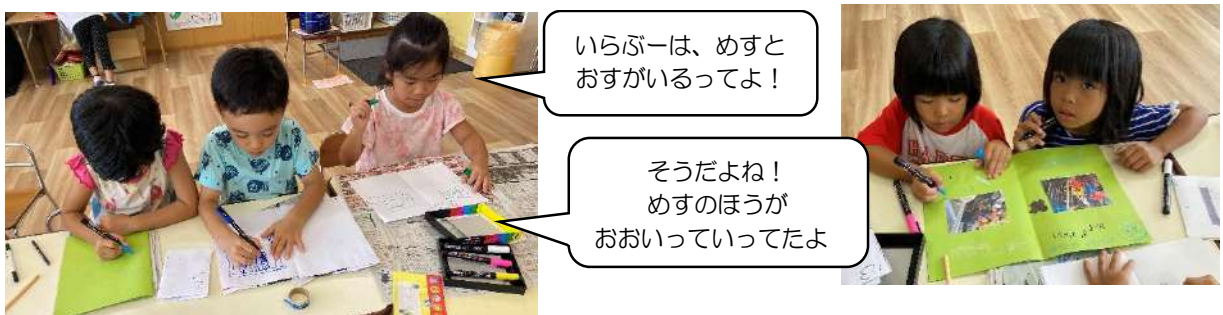


・実際にイラブーを見たり触れたりにおいを嗅いだりした子ども達は、驚きや感想などを言葉で表現している。また、不思議に感じたことを地域の方に質問する姿も見られた。園で見たイラブーの赤ちゃんとの大きさや色の違いに気付いたり、卵や皮も見せてもらったりと図鑑などで調べるだけでは分からない発見が沢山あり、さらに深くイラブーのことについて知ることができた。

〈エピソード3〉 イラブーはかせにいろいろなことをおしえてもらったよ！

・散歩から帰ってきた子ども達は、イラブーの絵を描きたいから、「紙ちょうだい」と言い、絵を描き始めた。

最初は、絵を描くだけだったが、描きながら島の人に教えてもらったことを振り返り、気付きや発見も紙に描くようになった。



・絵を描くだけでなく、イラストを見に行き気付きや発見、不思議なことなどを書いて、絵本や図鑑を作ってみる等遊びを深めてほしいと思い、写真を画用紙に貼り、子ども達がドキュメンテーションのようなものをつくることのできるようにした。

子ども達は、島の人に教えてもらったことだけでなく、実際に見たり触ったりして感じたことなども書いて、絵本や図鑑を作っていた。

・これまでの園生活の中で絵本を作ったり、小中学校の図書館に行って絵本を読んだり絵を描いたりする経験があったので、すぐに「絵本を作りたい。」「イラスト図鑑作る！」と言い、遊びが広がっていった。

◆子ども達が作った絵本や図鑑は、保育室の入り口に掲示し、保護者にも見えるようにした

イラストには
どくがある。



イラストのかわは
おまもり
へんしんする



きれいだった。
だけど
かわいそう...

イラストは、
手でつかまえる。

ママみて！
これ、〇〇がつくったんだよ！

今日ね、イラスト
見に行ったよ！

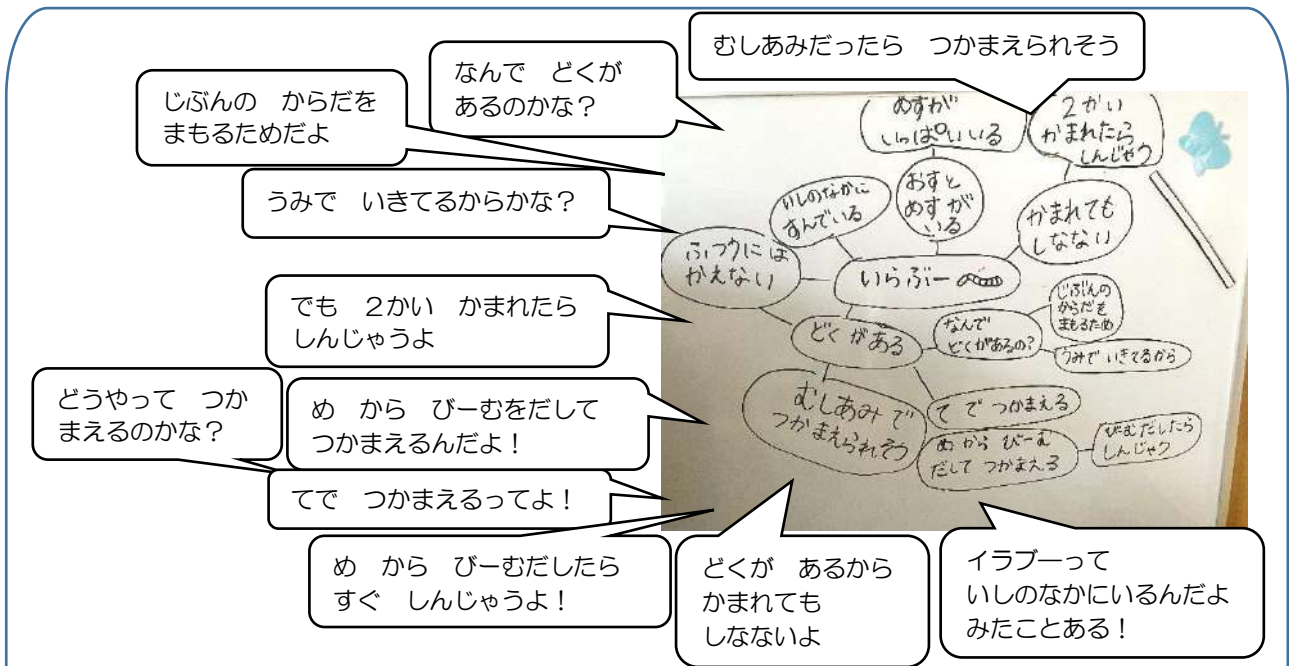


たまご ぷにぷに

〈エピソード3〉めざせ！イラストはかせ！

・感じたことや不思議に思ったことなどを友達や教師に伝えたりする中で、「どうして毒があるのかな？」「どうやってつかまえるのかな？」など、さらに疑問に思うことが出てきた。

○イラストを見たり、地域の方から話を聞いたりして、それぞれが感じたことや知ったことを伝えたり、友達の気付きなどを聞いたりして、さらに遊びが広がるといいな。と思い、子ども達と一緒にイラストについて話す場を設ける。



○子ども達の気付きや発見などをホワイトボードに書き、共有できるようにした。

・子ども達は、「もっといらぶーのこと知りたい!」「いらぶーはかせみたいになりたい。」と話していた。また、「いらぶーはかせに教えてもらったことをみんなに教える!」という話になり、「発表会で見せよう!」ということになった。



・発表会では、子ども達が作ったいらぶーについての生活劇やいらぶーについての絵本を地域の方々にも披露することができ喜んでもらったことで、地域とのつながりが深まった。

【成果】

・最初は、園庭に来たいらぶーの赤ちゃんを見るだけだった子ども達が、実際にいらぶー漁をしている様子を見たり、触れたり、地域の方に話を聞いたりすることで興味関心が高まり、さらに知りたいという気持ちが育っていった。

・地域の方に教えてもらったことや感じたことなどを絵本や図鑑を作ったり、生活発表会の劇で表現したりすることで遊びが広がっていた。また、子ども達の発見や気付きを地域の方や保護者に伝えるきっかけにもなった。

・久高島の伝統的なイラブー漁を通して地域の方と関わり、久高島について知り、遊びに繋がっていったと思う。

・追い込み漁や、イラブーについてなど実際に見たり経験したりするだけでなく、園生活の中で子ども達が好きな製作遊びや絵本作りなどつなげることでさらに遊びが広がっていった。

【課題】

・久高島では、普段の生活の中で地域行事に参加したり、小中学生や地域の方との交流の機会も豊富にあったりする。それをどのようにして子ども達の遊びや学びにつなげることができるかということが課題であった。

【改善策】

・今後は、イラブーになりきって表現したり追い込み漁からもっと魚について図書館で調べて見たりとさらに地域や小中学校とつながりながら遊びを広げていく方法を考えていきたい。

(4) 佐敷こども園

【テーマ】 地域文化継承における幼児教育

【目的】

県内各地域において受け継がれ地域の人々の生活と、そこで育まれた文化を支えてきた「しまくとうば」に、関心と理解を深め継承していくきっかけになって欲しい。

実践事例 1 『しまくとうばって面白い!!』 7月～1月現在 3歳児～5歳児

実践者：年少組：仲宗根麻衣子 高江洲翔子
宮城美恵子

年中組：山城美奈子 前城 啓子

年長組：佐和田美由紀 大城 智子
内間智代 平安名優織

【職員での導入の話し合い】

地域文化とは何かを話し合う中、園長先生の方言に職員が大笑いして和むことが多々あり、しまくとうばも地域文化、しまくとうばに触れ合う環境が一番身近にあることに気付く。佐敷こども園らしさは『しまくとうば』が一番楽しく取り組めるであろうと決定する。また、毎朝園長先生とうちなーぐちラジオ体操をしたり、食事時の「美味しい給食、うさがみそーれ」「くわっちーさびたん、まーさいびーたん」の挨拶に親しんでいるので、「しまくとうば」に関心を持てるような環境（人的・物的）を工夫していきたい。



【幼児の姿】

- ・佐敷幼稚園の時の名残で、食事時の『美味しい給食、うさがみそーれ』『くわっちーさびたん。まーさいびーたん』の挨拶が習慣になり、親しんでいる。

【保育者の願い】

- ・簡単な挨拶などから、「しまくとうば」に興味・関心を持って楽しんで欲しい。

〈エピソード1〉『ラジオ体操♪はじまいんど〜』全園児 7月末

夏休み期間に入り、登園を渋る様子がみられてきた中「ラジオ体操してきた！」とニコと笑顔で登園し、体操の動きを友達に話している兄弟児を見て、うちな一ぐちラジオ体操の曲を流してみる。すると数人集まってきて保育教諭の動きをまねて体操を楽しみ始める。また、島くとうばが面白いようで「ひじゃい(ひだり)って〜」と大笑いしながら体操を始めていた。

夏休み期間中は生活リズムが崩れてしまう子も多いので、朝の体操で身体を動かすことを通して、健やかな心の育ちの期待を込め、毎朝うちな一ぐちラジオ体操をホールで流してみることに。また、ラジオ体操カードも用意し、スタンプシールで視覚的にも楽しみを加えていく事で、回を重ねるごとに参加人数も増えてきた。

しばらくすると、「おはようございます。ラジオ体操終わってない？」と登園時の楽しみに変わってきた様子が伺えた。

〈エピソード2〉『避難訓練もあわていらんど〜』8月

毎月行われている避難訓練で全員が無事に避難し、振り返りの話の中で、園長先生のお話

『せんせいし〜たちた〜の話、よくゆ〜きいてちち、あわていらんど〜』に対して、大笑いする子や
??と不思議そうな表情をする子と、様々な反応が見られた。

年長さんからは、「何って言っているの〜?」「英語?」と質問。一言ずつ説明すると、「ありがにふえ
〜でえびる」「こどもたちわらびんちや〜」などと覚えてたの島くとうばを口々に言っでは楽しそうに笑い
あう姿が微笑ましかった。

【島くとうばの導入】

「園長先生が言っていた〇〇って何だった?」「うちな一ぐち数え歌知ってる〜!!」の子ども
たちの声が聞かれるようになり、島くとうばの面白さに興味を持ち、意味を追求する姿が見ら
れてきた。そのタイミングで、うちな一ぐちカルタや、うちな〜ぐち数え歌を導入。敬老お招
き会では、園長先生から方言を教わり島くとうばでの挨拶を披露すると、歓声があがり子ども
たちもご満悦な姿が見られた。



ね〜がね〜が♪
ひ〜が〜ひ〜が♪
おもしろ〜い♪



〈エピソード3〉『おか〜お帰り〜♡』8月中旬

母親のお迎えに、嬉しそうに駆け寄っていく年長女児。大きな声で『おか〜お帰り〜！』お母さんも、近くにいた保育者も、『んっ?!いま何って言った?!』と顔を見合わせてびっくり!からの大笑い♡『初めて言われた〜!新鮮!』と、一瞬にして穏やかな雰囲気包まれた。また別の日、『園長先生、またやーさい♪』(また明日〜)と、颯爽と帰って行った年長男児。思わず『どこのイケメンね?!』と突っ込みの声。次の日も来るかな〜と職員がわくわく楽しみにしていた。

保育者の思い

この出来事をきっかけに、その場の雰囲気を和ませてくれる島くとうばの力に期待をして、家庭も一緒に巻き込んで「しまくとうば」に親しんでいきたいと考えた。

〈エピソード4〉『アタビ〜はカエル🐸』8月中旬〜

こども園ホールの一画に、「えんちょうせんせいからのうちなーぐちクイズQ」コーナーを設ける。それに興味を示した子どもたちが集まり、友達同士で何だっけ?と考えたり、うちなーぐちカルタからヒントを得ようとしたりする姿も見られた。

翌日、園長先生に「アタビ〜はカエル」と嬉しそうに回答するA児。

園長「誰から聞いたの?」 A児「テレビでアタビ〜って名前のカエル人形が出ていたから分かった〜」 園長「すごいね〜、でいきと〜ん」 B児「可愛いはお母さんに聞いたけど忘れた〜」

園長「そーなの〜、でもあなた美らかーぎーねー」 B児「あっ、ちゅらかーぎーだ♪」「あははは〜」クイズに正解し、園長先生に褒められ喜ぶ友達の姿を見て刺激を受け、次々と園長先生を訪問し回答していた。「しまくとうば」で答えて、「しまくとうば」で褒めてもらえるやり取りを楽しんでいる園児「もっとクイズ出して〜」の声も多く、週に1回クイズを変更することとする。

えんちょうせんせいからのうちなーぐちクイズQ



カルタ遊び中に『あつた〜』と、答えを見つけ嬉しそうに報告。

あちこ〜こ〜見つけた〜!



アタビ〜はかえる



はんまよ〜
大正解!

イサトウーはカマキリでしょ!
ちょうちょは何だろう…

ちょうちょは、ひらひら〜じやん?!

〈エピソード5〉 替え歌合戦♪

カルタやうちなーぐち数え歌、家で見たテレビから島くとうばを見つけては、報告する子どもたちに知っている歌を島くとうばに変えて歌ってみないか提案。すると、『アタビの歌わかる!』と去年歌ったことを覚えている子と一緒に口ずさむ。途中忘れたところをそれぞれが創作していて、大笑い。本当?!誰が正解?と言いながら、聞いていた別の園児が『イサトゥの歌が〜♪』とアレンジを楽しみ始めた。

カマキリのわらべ歌もあるよ!と、沖縄のわらべ歌をリズム遊びに取り入れ、手遊びや表現遊びを始める。その中でも反応の良かった2曲『ふーゆめまー』と『あんなるさるぐわー』(国頭村のカマキリのわらべ歌)を生活発表会で披露したいと、練習し12月16日、元気に披露出来た。



本当はとんとんミーの歌を歌って欲しいなと、何度か聞かせてみたが、あまり乗ってくれなかった・・・

実践事例2 トントンミーは恥ずかしがり屋さん 11月15日 年中組

〈エピソード〉 トントンミーは恥ずかしがり屋さん(´艸`*)

佐敷こども園職員の園Tシャツに描かれている、トントンミーの絵を見て『これ何?アタビ〜?』と言いながら真似して絵を描き始めた4歳児。『なんだと思う?』『カエルでしょ。目がこんなしてあるさ(横についていると言っている様子)』『カエルは足があるんだよ。これはないさ』図鑑を広げてカエルのページとにらめっこしては、あれじゃない、これじゃないと会話が盛り上がる。

そこで、佐敷干潟へとんとんミーを探しに行くことに。潮が引いた干潟へ降りると早速、『カニがいる〜』『何か動いた!』と目を輝かせ、穴の中をのぞき込んだり『石の下にいるはず』と力を合わせて石をひっくり返したりと大はしゃぎで生き物を探している。しばらくすると、『うるさいから隠れたんじゃない?』と静かにするよう声を掛け合い始めた。しかし、とんとんミーは見つけられずに残念そうに帰園。振り返りの中で色々な気付きを伝え合っている。

イラストでしか見たことのないとんとんミーをみんなで探している。

これは何?魚?



やばい、カニだ——!!
はさむよこれ——!!



重い!一緒に持とう
せーの!!



これはヒヨッコ

これ、とんとんミーじゃない?

図鑑でも見つけられなかったとんとんみーの画像を出すと、カエルと見比べ意見を出し合っている。



色が違う。目の場所も違う。

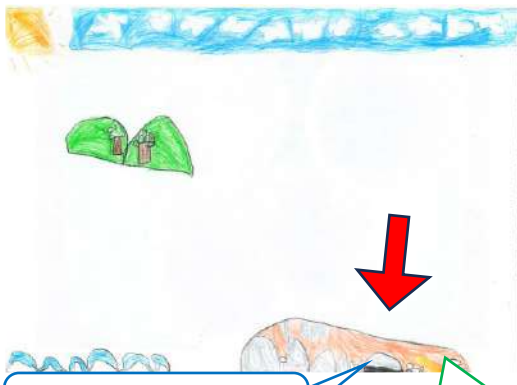
カエルは手と足もある。
カエルは葉っぱに居ると、
とんとんみーは砂に隠れている。

ヒレって何?

ヒレがある!
カエルは川にいるけど、
とんとんみーは海にいる。

とんとんみーはどこに住むの? 時期が悪かった? 探している場所が違う? 詳しい人って? 図鑑にもとんとんみーの情報はなく、ネットで調べるも、何年か前の情報しか出てこない。そこで、佐敷在住の職員に聞いてみると、2021年に起きた、小笠原諸島海底火山の噴火で噴出した軽石の影響でほぼ全滅したって聞いたよ。との事。また、砂浜より潮だまりに居ると思うよ。などの情報を得て、再度探しに行くも見つけることは出来なかった。

振り返りの後、干潟の絵を描き始めた子ども達、『とんとんみーはここ』と話す声に『どこどこ?』と探してみるも・・・姿を見ていない子どもたちは正直に(´艸`)描いてくれました。



石の下に隠れている

割れたガラス

『今日の絵(干潟へ行った)描いたよ』
綺麗な海、島、貝殻、カニ。
とんとんみーは・・・



ビニール袋が
浮かんでいる

砂の中に潜っている。

子どもたちの声の中に『割れたガラスでケガしたから、とんとんみー居なかったんだよ』『袋が流れてた』『ゴミのせいでどっかに逃げてるはず』などの、漂流ゴミについての声が聞かれたので、どうしたらとんとんみーの住みやすい干潟になるのか考える。

ゴミだらけ
でかわいそ
う・・・



綺麗になっ
たら、いろ
んな生き物
もっと見れ
るかな～



ガラスは手で
触ったら危な
いよ!!

誰が捨てたのか
ね?

【考察】

・聞いたことのあるラジオ体操の音楽で楽しみながら親しみ始め、うちなーぐちカルタや、うちなーぐち手遊び歌、園長先生との会話などで興味や関心を示し、こども園の中で日々「しまくとうば」に触れる機会が増えてきた。また、やり取りの中から新たな疑問が生まれ、家族や園長先生に聞いたり、カルタやテレビの情報から調べようとしたりと、「しまくとうば」を通しての、会話も笑顔も増えたように感じる。しかし、こども園と園児。親と子の間でのコミュニケーションの一つにはなったが、知り得た島くとうばを使う機会がなく少し残念に思う。

敬老お招き会では、子どもたちの「しまくとうば」による挨拶に大きな歓声があがったので、喜んでもらえた経験を積み重ねていくことで面白さも知っていけるのではないかと考える。それを発表する場所を設けるなど、地域のお年寄りとの交流を通して、豊かな人間関係をも築いていけたらと思う。

また、子どもたちから自然と「しまくとうば」が出てくるようになってきたので、「しまくとうば遊び」が佐敷こども園のカラーの一つになるといいなと考える。

・「しまくとうば」から、地域の自然へと関心が広がり綺麗な海にしたいという子どもたちの気持ちも汲み、今後も干潟だけでなく、地域の清掃活動へそして SDGs を考えるきっかけへとつなげていきたい。

【成果】

・うちなーぐちラジオ体操やうちなーぐちカルタ、手遊び、うちなーぐちクイズ等を通して「しまくとうば」に興味関心を示す園児が増えた。

・佐敷干潟に住むトントンミーを探しに出かけたが、海底火山噴火で噴出した軽石の影響等でトントンミーがいなくなったことを知り、また、干潟のゴミ散乱を目の当たりにして園児達は「どうしたらトントンミーが気持ちよく住めるようになるかな」と考えるきっかけになった。

【課題】

・課題として、こども園1年目という事で、佐敷幼稚園からの活動や地域文化を参考に受け継ごうとしたけれど、地域文化に詳しい方との繋がりまで持っていく事が出来なかった。

【改善策】

- ・まずは職員が地域文化を学んでいく事から始めていきたい。
- ・地域とつながりを持ち豊かな体験につなげていきたい。

テーマ「地域文化にふれる幼児教育」

〈地域文化研究に当たって〉

大里こども園のある南城市大里地区では地域の青年会などによる活動が盛んで、お盆の時期になると各地域でエイサーの太鼓の音が響いてくる。

園児も小さなころからエイサーを見たり踊ったりと触れてきた身近な文化なので、興味や関心を持っている姿が見られる。音楽の楽しさや、踊りのかっこ良さなどに関心が高く表現の一環としての取り組みが主で、保育教諭は地域文化として深く取り組んではいなかった。

今回の事例は、興味や関心の高いエイサーをきっかけに地域の文化に触れてほしいと、家庭の協力も得ながら、住んでいる地域の行事に込められた想いや、自分の住んでいる地域の文化に興味を持つ切っ掛けとなるような活動になったと考える。

今回の事例を通して今後園児がより地域文化に深く関わり、自分の住んでいる地域に誇りが持てるようになってほしいと願う。



活動の様子

幼児のつぶやき

保育教諭の思い

幼児の姿

7月、家庭で見たエイサーの動画をまねして段ボールとラップの芯でエイサーを楽しむ姿がある。周りの園児にも興味が波及し、「先生エイサーの曲かけて」と友達と一緒にエイサーを楽しむ姿が見られる。



【祭りでエイサーやったよ】

8月、与那原祭りに遊びに行った園児同士で、祭りの思い出を話す。その中で「綱引きも行ったよ。」「エイサーもやったよ。」「エイサーかっこよかったな。」という話題で盛り上がる。父親が地域で旗頭をやっている I 児が「旗頭もやったよ。俺の父さんもやってる。」と言うと、「はたがしらって何？」と周りで聞いていた園児が興味を持つ。I 児が「棒があるさ、なんか丸いの付いてて、こんなして持つのさ」と身振りも交えながら説明するがなかなか伝わらず、「先生描いて」と保育教諭にお願いをする。ホワイトボードに I 児のイメージを絵で表す。周りの園児も「見たことある。」「かっこいいよな。」と盛り上がる。



イメージする旗頭を絵で表現している

ここにかざりがあつてから・・・

テープ貼るから、ちょっとこっち抑えといて

協力して旗頭作り



旗頭作りを通して、友だちと関わる中で自分のイメージを絵で表現したり、思いを伝え合ったり試行錯誤したりしながら一緒に活動を展開する楽しさを味わっている。

【豊かな感性と表現】 【言葉による伝え合い】



天井まで届きそうだけど

丸めた段ボールの中に竹の棒を差し込み、まっすぐ持ち上げる事が出来た。

旗頭を揚げ満足げに廊下を練り歩き、その後エイサーをやっている園児の傍でリズムに合わせ旗頭を揚げ楽しむ。



おー！！まっすぐ立った

いいよ、父さんのも
こんぐらいでっかいから

段ボールをつなげて作るも、強度が足りずに折れ曲がってしまう。解決策がないか園児に投げかけると、「硬い棒くっつけたら？」と意見が出て、以前に竹の棒を使って虫取り網を長くした経験のある園児が、「倉庫に棒あったよ。あれ使えそうじゃん」とアドバイスをもらい、イメージした天井まで届く旗頭ができあがった。

【思考力の芽生え】 【言葉による伝え合い】 【豊かな感性と表現】

こっちにさ、ガムテープ貼ったから俺の太鼓
いい音するんだよ。



エイサーを楽しんでいる園児はより本物に近い音が鳴るように様々な種類の素材の箱を試し、一番自分のイメージに近い音のする箱を選び、友だちと繰り返し太鼓作りを楽しんでいる。

【自立心】 【思考力の芽生え】

【エイサーってなんで夏だけ？】

「俺のお家の近くもエイサーの音聞えてきてたよ」「夜になったら聞こえるよな」と家の周りで旧盆に向けた地域のエイサーの練習が行われていることを園児が気にし始めた。

踊りの楽しさ、かっこよさだけでなく、地域の伝統芸能で行われるエイサーに込められた想いなどにも気付いてほしい。と思い「エイサーの音って前は鳴ってなかったけどなんで夏になったら聞こえて来たのかな？」と園児に問いかけてみる。

「夏にエイサーをやる理由」

様々な考えが上がったが答えは分からず、「誰か知ってる人いるかな？」と保育教諭が投げかけるとI児が「俺の父さんだったらわかるはず」と手を挙げ、周りの園児も「お父さんに聞いてみる」「〇〇のおじいちゃんだったらわかりそう」「俺もエイサーやってる人たちに聞いてみようかな？」と家庭や地域の方に聞いてみるようになった。

なつはみんながくるから

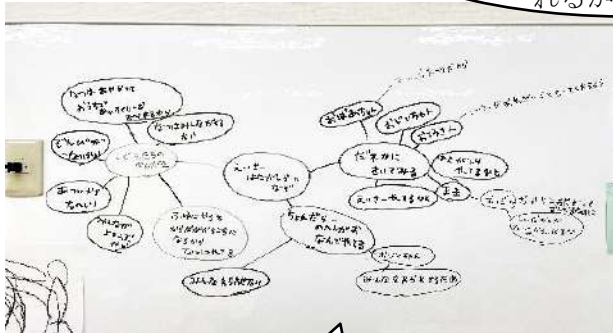
あついから たのしいから

ぞんぴが こないように

ふゆにやったら からだが
かちこちになるから
なつにやってる

なつにやったら あせかいて
おうちかえって あいす たべら
れるから

みんなが
よろこぶから



週明け数人の園児が、「先生エイサーの謎聞いて来たよ。」「お家の近くのエイサー見に行ってきたよ。」と報告に来る。学級での振り返りの時間を利用して発表する。

「夏にエイサーをやる理由」家庭で聞いてきた答え。

かあさんが おぼんだから こっち
だよって おしえるためにつて。

おばあちゃんが、なつのおまつりだからって。
おとうさんは しーさーが おねがいごと
かなえてくれるからって。

おぼんってなに？

しんだひとが てんごくから かえってくるんだよ
おじいちゃんとか おとうさんのにいちゃんとか

ウェビングマップを通して、友達と気軽に言葉を交わすことができる雰囲気の中で、エイサーについて自分が聞いてきたことや調べたことを相手に分かるように言葉で伝えたり、友達の話の聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しんでいる。

【言葉による伝え合い】

好きな遊びの時間に継続して、エイサーを楽しむ姿が見られる。家庭でも話題に上がることがあったようで、「エイサー見に行ったよ」と話をする園児が増える。エイサーだけでなく、獅子舞などにも興味をもち廃材を利用して獅子頭を作り始める。

9月、学年誕生会で、学級の出し物として旗頭、獅子舞、エイサーを細かい振り付けの所にまで意識して踊っていた。見ていた園児から「かっこよかった」という感想が出たことで自信をもち、更に意欲がたかまった。



ししまい こんな
して かむんだよ

おれも かんてー



くるって まわるのが
かっこよかった

すわって ポーズしてるのが
かっこいい



おとさないように
おれが ささえるよ

〈さくらフェスタをやろう〉

10月、青年芸能フェスタに行った園児が学級での集まりの時間に学級全体へ報告する。見に行った子は「俺も行った。」「チョンダラーもいた。」等、一緒になって話をしている。もう一度エイサーを披露したいと思っていた園児も加わり、「さくらフェスタ」として披露したいと取り組み始める。

「さくらフェスタ」に披露したいもの、必要なものを書き出す。



ほら この
ちよんだらーとかいたよね



おみせも あったよ
カフェも やっていい？

おんなのひとの おどりも
かわいかったから やろう

旗頭の壊れているところや、さらに飾りをつけたいところなど、作ったり、青年芸能フェスタで見た衣装をつけたいと、ビニールなどを使い衣装作りをしたりする。

カラービニールで衣装作り。



おれのおとうさんの はたがしら
うえに たかがのってたよ。
はたには れいとくって かいてある



(園児)わからん
おとうさんに きいてみるさ

(保育教諭)れいとく？
どういう意味なの？

おとうさん みんなに げんきでいてほしいって
はたがしらやってるってよ。

旗に込めた思いにも気付いてほしい。

11月、スポーツフェスティバル(運動会)への取り組みが始まり、さくら組らしいオープニングを披露したいと学級で話し合いをし、スポーツフェスティバルでもエイサー、旗頭を披露することになった。



みんなで力を合わせて旗頭を
あげるぞー！！



自分で手作りしたパーランカーを持って



運動会が終わり、ウェビングマップを見て、「そういえばこれいつやるの？」と再び「さくらフェスタ」について話す園児。学級での集まりで「これ(さくらフェスタ)みんないつやる？」と投げかける。カレンダーを見ながら、相談し合い、舞台上で披露する日を決め準備をする。再びエイサーや地域の文化に興味を持った園児は、休日に「うふごとムーチー祭り」「大城区の組踊り」などの地域の行事に保護者と一緒に参加し、休み明けに「昨日エイサー見た。」「獅子舞の中に二人入った。」「おきハムのやつ(組踊り)見に行ったよ。」と友達と話し合う姿が見られる。また、三線や棒術などを習い始めた園児もいて、さくらフェスタ後も継続的に取り組みを進め、発表会などに披露することを楽しみにしている。

ビニールのサージ獅子舞づくり

おきハムのやつって
なに？

子ども達は、組踊りのこ
とを「おきハムの」で、
通じ合っている。



おきハムのやつ
見に行ったよ

おきハムのCMで
やってるさー。
(組踊り)

ちよんだらーのお面作り。



発表会に向け現在取り組み継続中。

廃品を利用し、獅子舞作り

〈新春の集い〉

1月、エイサーを切っ掛けに園児が地域の伝統文化に興味が出てきたところで、他の伝統文化にも触れてほしいと新春の集いで職員が琉舞・空手・獅子舞・地方を披露しました。保育教諭が出てくると「すごい。」「やってみたいな」と目をキラキラさせて観ていました。



「ぼくも空手やって
みたいなあ。」



宇大城の獅子舞



新春の集いで実際に見たことで、2月の生活発表会でも獅子舞やうちなあ遊びをやりたいと手作りの獅子舞や大太鼓・旗頭と自分達が好きなしまくとぅばの手遊びや集団遊びを発表会で、自信をもって披露出来ました



【考察】

- ・園児の興味のあるエイサーの題材で地域の行事との関わりも感じられたことで、活動が継続できたと考える。
- ・青年芸能フェスタで直接伝統芸能を鑑賞できたことで、園児同士のイメージ共有ができ、活動が広がった。
- ・疑問に思ったこと等を園だけではなく、家庭でも調べたりしたことで、家庭で地域の伝統文化について話し合うきっかけにもなった。また、エイサー以外の地域の伝統行事に興味を持ち、旧盆という地域の行事へ関心を寄せるきっかけにもなった。
- ・家庭や地域に疑問などを持ち帰り、解決できたのは良かったが、更に地域の人材も絡め活動を展開していけたら、より興味関心が深まるのではないかと考える。

【成果】

- ・園児が地域伝統芸能の獅子舞やエイサーなど本物に触れる経験を通して心が動き、保育教諭と共に遊びや疑問を生み出し、試行錯誤することで継続した遊びの展開につながった。
- ・疑問に思ったこと等の答えを、地域や家庭で自ら聞いたことで、より興味や関心をもつようになった。また家庭でこども園での出来事を話すきっかけにもなり、活動を広げていけた。
- ・地域の自然や文化を遊びに取り入れたことで、園児と保護者が地域の行事に興味や関心を持ち、地域とつながる切っ掛けとなった。

【課題】

- ・地域の歴史・文化、自然環境を活かした保育・教育をするために、保育教諭が地域の良さ、歴史・文化を知る必要がある。

【改善策】

- ・地域資源、保護者や地域の方々と関わりながら、保育教諭や園児達が地域の良さや課題を知り、地域特性に応じた実践に取り組む。

「南城市地域文化研究会 ～わくわく会～」編集後記

今年度は、地域文化研究会2年目となりますが幼児教育施設は大きな変化がありました。大里南幼稚園、大里北幼稚園、佐敷幼稚園が閉園し公私連携幼保連携型認定こども園へ移行しました。公私連携幼保連携型認定こども園3園と南城市立久高幼稚園、南城市立幼保連携型認定こども園の5園で「南城市地域文化研究会」を再度立上げ取り組んで参りました。

昨年の成果を活かし継続して取り組みを進めている園、こども園へ移行し地域を知る職員がいない中、試行錯誤しながら研究を進めている園等、課題がある中ではありますが、子ども達とわくわくしながら地域の文化を学び、保育の質向上を目指して取り組んでいる様子が伝わって参ります。

知念こども園の「ちょうちょになって」、玉城こども園の「ハーリーってかっこいい」、久高幼稚園の「めざせイラブーはかせ」、佐敷こども園の「しまくとうばって面白い!!」、大里こども園の「地域の伝統文化に興味を持つ：エイサー&旗頭」等、子ども達が夢中になりながら探究したり、友達と一緒に協同したりしながら遊びこみ、豊かな体験を広げ保育の充実に繋げています。

今後とも、地域とつながり協働することで南城市の素晴らしさに気付き、「南城市大好き！」な子ども達が育つことを願っています。

二か年間、講師の宮城利佳子氏に親切丁寧にご指導いただき深く感謝申し上げます。

令和6年3月吉日



南城市幼児教育センター

幼児教育アドバイザー 大城美恵子

幼小連携アドバイザー 伊集 恒子



8月31日 第1回実践事例検討



11月1日 第2回実践事例検討

おわりに

南城市の幼児教育関係者と、琉球大学教育学部の宮城利佳子先生との協働で、南城市地域文化研究会～わくわく会～を令和4年度に立ち上げ、地域文化にふれる幼児教育の視点で実践事例集をまとめることができました。事例集ができたことにより、これまで各園で実践したことが共有化でき、地域と関わる実践が深まり、更に他の園にも広がりつつあります。

令和5年度も昨年度に引き続き実践を重ね、その成果を報告書にまとめることができました。

南城市内には、魅力的な地域文化に係る資源が豊富にあります。佐敷干潟や奥武島や久高島のイノー等、各地にある湧き水、市内各地で見られる野鳥、虫、草花などの自然に関すること。市内各地に伝わる伝統文化、市内各地にあるグスク、古くから伝わる昔話や民話、神話など文化的なこと。その良さを、子どもたち、保育者、保護者、そして地域の方々がとともに探究し、楽しみ、日々の教育・保育の中に生かせることが、地域とともにある園を創り、「社会に開かれた教育課程」の具現化ができ、主体的な子どもを育むと考えます。

そのためにも各園の保育者の「引き出し」が大切になると思います。南城市の豊かな自然や歴史文化に関する知識があるか、それらを生かした体験を保育者自身がしているのかによって、子どもたちの取組みが違ってきます。今後は、幼児教育関係者、保育者が五感をとおして「引き出し」を増やす取組みを実施することが大切になると考えます。南城市の豊かな地域文化を幼児教育に生かしていくために、南城市幼児教育センターの取組みとして検討し、実施したいと思えます。

最後になりますが、昨年度に引き続き本実践集をまとめるに当たり、事例提供をして頂いた各園の皆様、そして御指導頂きました宮城利佳子先生にお礼を申し上げます。

南城市幼児教育センター長 與儀 毅